

昭和52年5月25日 第3種郵便物認可 令和3年3月10日発行（毎月1回10日発行）



世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

3月

2021 No.486



世界法民連帯 円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のSABA運動で世界の平和に尽くしましょう。

SABAとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの1食1円のSABAとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築(教育)や、井戸やトイレの設置(環境衛生向上)を支援する、国際ボランティア資金の運動です。1食1円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やSABA運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもしろい』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

円福友の会はプラティープ財団に協力してタイのクロントイスラムの子どもたちを支援しています。

写真はプラティープ財団が2018年に刊行した「プラティープ財団の40年」(「スラムの天使」の歩みと闘い)の表紙です。

子どもたちに囲まれて中央におられるのが、「スラムの天使」と呼ばれ、「アジアのノーベル賞」ともいわれるラモン・マグサイサイ賞を受賞されたプラティープ先生です。

3月号の内容

にこにこ法話 百季樹人	1 p
教育里親	3 p
途上国開発協力こぼれ話 ⑨ラオスのダム開発の話	7 p
教育随想 心の教育	12 p
おっしゃんの修証義解説	14 p
敬愛信	16 p



松本深志高校の校長室に『百季樹人』の額が掲げられています。どなたの字か分かりません。意味も分からないでいたら、

百季樹人

誰かが教えてくれました。

「百季樹人」は管子の言葉で、「一年先を思うものは花を植えよ。十年先を思うものは木を植えよ」「百年

先を思うものは人を育てよ」だそうです。そのころは、そんなものかなあと思っただけでした。

愛育園の仕事に携わってみると、「百年先を思う」は、愛育園の百年先でした。今の愛育園の子育てを百年先まで続け、発展させたい。それには今の子どもたち

を育て、愛育園の養育を引き継いでもらうことが一番であることに気付いたのです。

今、愛育園の子どもたちの心を満たしてあげることができるようになりました。子どもたちは職員になついています。その姿は家庭以上です。とっても微笑ましいです。子どもたちが愛育園を大好きになりました。この子どもたちが短大であるいは大学で学んで、愛育園の指導員

ニコニコ法話

兼保育士になってくれて、今の愛育園の養育を引き継いでくれたらどんなに良いだろうかと思いました。きつと、子どもたちも喜ぶし、愛育園の生活にもっともつと力が入るでしょう。これまでの卒園生には、それだけの心を持つていて人間を育てることができませんでした。でも、今はできます。

卒園式でYさんをお願いしようと思います。しっかりと勉強してきてね、待っているよ、と。これこそ究極のアフターケアです。きつと、これをやれる児童養護施設は少ないと思います。もしかしたら、ほとんどないかもしれません。

円福寺愛育園がこうして、人を育てて今の養育を引き継ぎ発展できると良いなあ。私に夢ができました。

これは、まだホーム長にしか話して

ありません。

卒園式が終わるまで秘密です。皆さん、秘密を守ってくださいね。



教育里親

円福友の会は、タイのバンコクにある、クロントイスラムの子どもたちを『スラムの天使』と呼ばれた、プラティーブ・ウンソンタム・秦氏が設立したドウアン・プラティーブ財団に協力し、教育里親となって支援しています。

これまでクロントイスラムについても、プラティーブさんについても、紹介する機会がありませんでした。2018年に「ドウアン・プラティーブ財団の40年」の冊子が刊行されて、1978年からの歩みと闘いが記されました。円福友の会が支援しているスラムについて、皆さまにも知っていただきたく、ここに連載いたします。

私は、2014年のカンボジア訪問の折に、一人でクロントイスラムを訪ね、プラティーブ先生とお会いし、円福友の会が支援する学



生ともお話することができました。

スラムのなかもご案内いただきましたし、学校で勉強している子どもたちも見ることができました。でもクロントイスラムがどんな歴史の中でできたのかは知りませんでした。

もちろん、プラティーブ先生の願いやご苦労も知りませんでした。

四十年記念誌を読むと、「闘い」続けて今があり、今も闘い続けられておられることが分かります。皆さまもぜひお読みになって下さい。そして、引き続き教育里親としての支援をお願いいたします。



はじめに

題名だけを目柄にすると、よく世間一般に出版されている記念誌だと思われるかもしれませんが。ある意味でその通りですが、本を通して読み進められると単なる記念誌ではないことに気付かれるでしょう。この一冊には、ある一組織、またある一人の話だけではなく、政府と一般社会の人々の偏見と差別によって、住む場所や社会的立場さえなく、政治や

経済に抑圧されている第二世界、第三世界の人々と変わらない暮らしをしている、この国すなわちタイの貧しい人々の話が詰まっています。

ドゥアン・プラティープ財団、そして当初からタイ国最大のクロントイスラムの住民と密接なつながりを持つ財団の創設者で事務局長のプラティープ・ウンソントム・秦の背景には、スラムの住民たちが直面しなければならぬさまざまな問題が横たわっています。それらは一見雑多で些細な要因に見えるかもしれませんが、実によくタイの貧しい人々の問題をうきぼりにしています。子どもたちに教育を受ける機会を与えること、貧しい人々に安心して住める住宅を提供すること、コミュニティに蔓延する麻薬を阻止すること等々、財団そしてプラティープと「メー・クルー」（お母さん先生）と呼ばれる姉のミンボン・ウンソントム姉妹は多次元、多岐にわたる現実を少しずつ学び結晶化させながら問

題を解決していかなくてはなりませんでした。

そうした居住地要求の闘いや集会を通して「ネットワークづくり」という住民の連帯が強まり、政策の転換、政治の舞台での権利や権利を分かち合うことなどの実現を通して、民主主義が貧しい人々にとっていかに重要であるかという認識をもたらし、広げました。

この四〇年間の全ての活動を一冊にまとめる試みは手に余る強気と捉えられるかもしれませんが、とにかく現実のものとししました。読者の皆様に少しでもご理解いただけるように、ラモン・マグサイサイ賞を受賞した一九七九年にドウアン・プラティープ財団を創設してからの四〇年を第一期から第四期まで四つの時期に分けて展開しています。

「スラムの天使」と呼ばれてきたプラティープ・ウンソントム・秦とその仲間たちの歩みと闘いの記録です。どうぞ一読ください。



ブミボン前国王哀悼の意を込めて腕に黒い喪章リボンをつけたプラティープ先生

巻頭報告

貧困に苦しみ人々・子どもたちと

歩み続けてきた四〇年

プラティープ・ウンソントム・秦

一、私の原点

私たちドウアン・プラティープ財団が苦難な問題に奮闘し、貧しい人々と豊かさに満ち溢れる人々との、お互い手の届かないほどに

なってしまうている大きなギャップをタイ社会に少しでも気づいてもらおうと道を切り拓いて四〇年になります。この四〇年の歳月は私たちにとって決して短いものではありません。貧しい人々が低賃金の出稼ぎのために地方から大都市バンコクに流入しはじめて六十年余りになります。スラムは、こうした未熟練で、体を張って働くしかない肉体労働者たちの住処すみかです。

私は貧しい子どもたちのためには教育がとても重要だと考えています。子どもたちが、学ぶ機会を得られれば、少なくとも質の良い労働者を育て、きつと将来、社会に多くの生産や利益をもたらすことに貢献できると信じています。

今から五十年前、姉のミンポンとともに志した『一日一バーツ学校』は、スラム内の汚水に満ちた湿地帯に高床で建てられた木造二階建ての自宅の一階部分を教室として開放し、学校に行けない子どもたちが読み書きが

できるようになることを目的としました。しかし、やがてその貧しい子どもたちには出生証明書や住民登録書がないために政府の公立学校には入りたくても入学できないことが分かりました。そのうえ、正真正銘のタイ人であり、タイの大地に生まれて生きているにもかかわらず、多くの家庭で子どもたちの祖母や母親さえも公的証明書が無く国の恩恵を受けていないことが明らかになってきました。

『一日一バーツ学校』は、やがてタイ政府港湾局の東地区の拡張のために立ち退きを迫られました。その頃になると、『学校』は、貧しい住民たちが仕事場の近くに何とか自分たちの住処を要求することは出来ないどころかと集まって相談する集会所としても利用されていきました。しかし当局の役人たちが何人もやってきて、「政府の認可を受けていない学校は違法だ。すぐ閉鎖せよ！」と命じられました。

(続く)

途上国開発協力こぼれ話

⑨ ラオスのダム開発の話

円福友の会顧問 吉田恒昭

先月号に続いてラオスでの話です。今回はいささか土木事業（インフラ）に関する専門的な話になりますが、どうぞお付き合いください。

ラオス北部に位置する古都ルアンパバンから首都のビエンチャンへは陸路で行けば四〇〇キロほどの距離ですが内戦状態で定期バスもなく、再びオンボロ飛行機で移動しました。天気が良くて飛行機は雨漏りこそはしませんでした。がビエンチャン空港に着いた時には、せっかく回復しつつあった耳の痛みが再発してしまいました。

数週間前のバンコク滞在中に、国連アジア極東経済委員会（ECAFE）の立派なビルを尋ねました。この委員会の下で一九五七年

に設立されたメコン川下流域調査調整委員会（通称メコン委員会）というのがあります。このメコン委員会はメコン川の下流域四か国のカンボジア、ラオス、タイ、ベトナムで構成されており、国連からの資金と技術支援の下でメコン川に関する開発調査計画を実施しています（写真①）。土木工学を学ぶ学生にとっては国際大河川の総合開発計画を先導立案する誠に夢のある多国籍組織なのです。

日本を発つ前にこの組織の存在を聞きおよんでいましたので、アポなしで委員会事務局に飛び込みまし



写真① 国連メコン委員会の調査船、
ビエンチャン付近にて筆者撮影、1968年

た。幸いにも日本人の専門家である堀博氏にお会いでき、アジア途上国における水資源開発の夢と課題などのお話を拝聴できました。

自宅に招かれて夕食まで頂きました。堀氏のメコン川開発にかける情熱は私の心底に響きました。その堀氏から「ラオスのビエンチャンに行ったら、ナムグムダムの工事が始まっているので是非とも日本工営の事務所まで話を聞きなさい」と強く勧められました。

ビエンチャンに着くと早速私は日本工営の事務所を訪ねました。ここでも運よく事務所長の吉松昭夫氏と面談出来たのです。丁度日本から出張で来ておられた電力担当の野沢陸氏ともお会いできました。お二人は開口一番「最近の日本の青年は『二人のため、世界はあるのー』などと歌って誠に覇気がない、貴君のようにアジア開発を志すとは大いに感心だ」と大歓迎を受けました。続いて、「卒業したら必ずわが社（日本工営）に入れ」とのお言葉で、私の卒業後の進路がここビエン

チャンで決まってしまったのです。この時から二年半後に、私は日本工営の技師見習いとなっていました。

かくのごとく、私は、メコン川下流域における水力ダム開発で先陣を切った伝説の人、吉松昭夫氏に辿り着いたのです。吉松氏のアジア途上国開発に対する熱き情熱に触れ、得難い薫陶を受けることになるのでした。一方、野沢陸氏にはビエンチャンからメコン川を越境してタイと結ばれる国際送電線の建設現場を案内して頂きました。このメコン川を渡る区間の送電線設備は世界でも珍しい国連管理施設となっています。

ナムグムダムとはビエンチャンの北九〇キロを流れるナムグム川に建設された水力発電用の高さ七五メートル、堤長四六八メートルのコンクリート・ダムです。ダム湖の面積は琵琶湖の約半分ほどもあり、総貯水容量は七〇億立方メートルもあり日本で最大の徳山ダム湖の約十倍です。一九五九年に国連の特



写真② 紙幣掲載の1972年竣工時のダム



写真③ 発電機が増設された最近のダム

別基金と日本政府の準賠償資金により日本工営が開発調査を行い、一九六五年に工事が始まり、私が訪れた一九六八年の秋頃は工事が最盛期に入る段階でした。工事は順調に進み一九七一年にダムは締め切られ、一九七二年から発電が始まりました。

このナムグムダム事業が学生の私を夢中にさせた理由は、その事業を実現させる全てが土木技術者の夢に溢れていたからです。土木事業（インフラ）は古来から人々の生産と暮らし（文明）を支える基盤を創ります。ナムグムダム発電事業の先験的ユニークさは、先ず基本調査・計画を国連特別基金が支援し国連メコン委員会が担当したこと。建設は日本を含めた先進八か国が無償資金を提供し、タイからはセメント借款（発電開始後に電力で返済）を行うことになったこと。事業全体の資金管理と建設監督は世界銀行が担っていること。一方、国連と国連メコン委員会は事業の遂行に当たってラオス内戦の障害を最小限に抑えるべく最大限の努力を行っていること。そして、日本人として誇りに思うのはこの事業の推進主体が日本工営で建設事業の設計施工監督をし、ダムの施工は日本企業の間組であることでした。

加えて、特筆すべきことは事業がもたらす

電力をラオスとタイの両国が国境を越えて分け合うということです。私が現地を訪れる一年前の一九六七年に、タイとラオス両国はメコン川を越えての電力交換協定を結び、翌年に七〇kmの送電線が完成した時には、両国の国王がメコン川上で完工式典を挙げて、両国王が固い握手を交わしたのです。つまり、一九六八年からナムグムダムが完成して発電が開始される一九七二年まではタイの電力がラオスに供給され、ダムの工事などで利用され、ダムでの発電が始まると今度はラオスからタイへと電力が供給されたのです。

上記のように国連、国際機関、そして先進諸国からの開発支援がラオスとタイの両国の経済開発を支援し、併せて両国の平和共存を促進するという理想が電力（インフラ）開発を通して現実になっていったのです。私の生涯のテーマの一つとなった国境を超えて開発される越境インフラ整備による平和構築の理念が芽生えたのは、この旅でお会いできた堀氏、

吉松氏、そして野沢氏との出会いがあったからでした。古希を過ぎてわが人生を振り返れば「お世話になった人達ばかり」です。

このナムグムダム事業はラオスの内戦（一九五三年から一九七五年）が激化する中で建設されました。ダムの現場を挟んで反政府軍と政府軍の砲弾が飛び交いました。反政府（ラオス愛国戦線）の代表は「ナムグムダムはどちらが天下を取ってもラオスの為になる事業だから妨害はしない」と述べて、ダム現場を直接の攻撃対象としたことはなかったそうです。

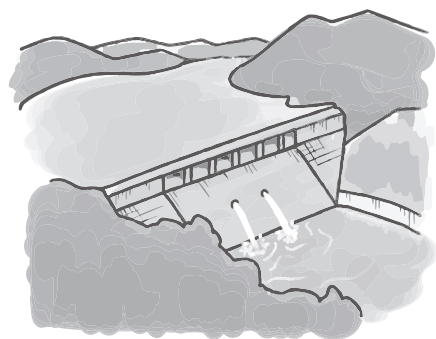
しかし、一九七五年にラオスに社会主義政権が誕生するとタイとの関係は悪化し、数年間はメコン川を越えて砲弾が飛び交う事態にもなりました。しかし、このナムグムダム事業で成立した両国による電力相互交換だけは決して途絶えることがありませんでした。両国の関係者はこれを「メコン精神」と呼んで大いに誇りにしています。

ナムグムダムが一九七二年に発電を開始した時は発電機二基で三万kWでしたが、その後世界銀行、日本、アジア開発銀行などが融資して増設に増設を重ね、二〇二〇年時点では発電機八基で二十八万kWと当初の十倍近くの発電能力を有するに至っています。この電力事業（エネルギー・インフラ）はラオスの水力開発の原点であり、外貨獲得による国家経済発展の救世主であり、その後のインドシナ半島水力開発のモデルであり、これからのインドシナ地域電力統合実現への先駆者になっています。メコン精神がインドシナ諸国に社会体制を越えて伝搬普及した証です。

つまりナムグムダム事業はインドシナ諸国における最初の共に発展を目指す国境を越えたインフラ事業であったとも言えるでしょう。実際、メコン流域諸国は今や電力の相互交換に加えて道路も越境してバスやトラックが行き交う単一市場になっています。越境インフラは国境を越えての共栄共存の基盤を形

成する手段でありその成果とも言えるのです。

想像してみてください、もし水と電気と交通を隣の国と相互融通し合っていたなら、隣の国と喧嘩できますか？ 欧州連合（EU）が成立しているのは越境インフラが欧州諸国を網羅しているからなのです。



教育随想

心の教育

心の教育

これまでの高校教師と愛育園の園長の仕事を振り返って、私がしてきたこと、目指してきたことは、授業を含めてすべて心の教育・心の養育であることに気付きました。学校を綺麗にすること、朝は黒板が綺麗な教室に生徒を迎えること、ゴミが落ちていない校地に生徒を迎えること、綺麗なトイレを使ってもらうこと、すべてが生徒の心を綺麗にすることにつながっていることでした。心が綺麗になると、奇跡が起きました。学力が向上しました。部活が強くなりました。学校が活性化しました。

授業も、生徒との心の交流でした。生徒がリラックスして、安心して心を開いてくれると、本音を語り本音で考えてくれます。本音の交流があります。その裏には安心があります。本音を語っても、教科書通りに答えずに、間違ってもだれも馬鹿にしないし、先生が受け入れてくれるという安心感・安全感を生徒は感じているのです。その結果、見せかけのうわべだけではない、覚えた知識を吐き出すではない交流があり、本当の知恵や知識にたどり着くのでした。それは生徒にとって本当に「楽しい」ことなのです。ある生徒が一年間の授業の終わりに書いてくれた感想です。

『なぜか、九組（理数科）の人たちは、物理の時間になると騒ぎます。他の授業のときは、ほとんど静かだというのです。ところで私は一番前の席で「先生おこるかな。おこるかな。やだなあ。」いつも思っていました。ところが、先生は、おこりませんでした。いつもにこにことして、おこったことはありませんでした。』

それが私の心に一番残ったことでした。

先生 三年生になっても、決しておこらないようにおねがいします。』(『屋代高校理数科二期生』)

安心・安全を願う、生徒の心が伝わってきます。おこつて生徒を静かにさせて、本当の学習はできないのではないのでしょうか。

次は、同じクラスの生徒の感想です。

『最後に先生独自のものとして、班ノートがありました。あれは、他の班の人はどう思っているかわかりませんが、少なくとも僕らの班のメンバー(F、T、M、M)は一人一人のノートを読み、そして先生の返答を読み、そして友人の考えを吸収して自己を成長させまた見つめなおすのにとっても役だったと思っています。一年間楽しい授業をありがとうございました。』(同)

私は、私と生徒の心の交流に班ノートも使っていました。それは生徒同士の心の交流にもなったのでした。次の感想は理数科の四期生のものです。私の大切な宝です。

「先生の授業は、楽しくて、どこかきとうな感じな授業だったので、物事を難しく考えて必死に取り組む姿勢が全くだめだということが分かった。ただ、その中で、必要とされる事柄を、分かり易くやっていくことこそが一番いいことだとつくづく感じた。本当に楽しい授業なので、あまり勉強をしているという実感がなくできた。僕は、こういうのが大好きだ。本当に、先生に教えてもらつて良かったです。ただ、勉強のことではなくて、先生の人柄や考え方というものに、共いでき、また、尊敬できる点がたくさんあったからです。まだまだ教えていたきたいことがたくさんあるので少し残念に思います。大学入試を目前にして、選択をせまられるこの時期で、先生の考えを知ることができて、なんとなく、今まで以上に親密になった気がしてうれしかったです。ありがとうございました。」

この生徒は、昨年十月に十四年ぶりにひよつこりと訪ねてくれました。そして年賀状に「心の恩師」と書いてくれました。

おっしやんの修証義解説

② 利行りぎようというは貴賤きせんの衆生しゆじように於おきて利益りやくの善巧ぜんぎようを廻めぐらすなり、窮きゆう龜うきを見病みびよう雀じやくを見しとき、彼かれが報謝ほうしゃを求もとめず、唯ただ単ひとえに利行りぎように催もよおさるるなり、愚人ぐにん謂おもわくは利他りたを先さきとせば自みづからが利省りはぶかれぬべしと、爾しかには非あらざるなり、利行りぎようは一法いっぽうなり、普あまねく自他じたを利りするなり。

23・三つには利行

利行とは、生きとし生けるものが、花が蜜をあたえれば蝶が花粉を運ぶように、互に互を利益する平和な相互依存の法則であります。利益を独占し他をしいたげることによって生存する弱肉強食の法則は戦争につながる法則であります。資本家も利益をひとりじめせず、労働者の生活の安定と向上をはかり、また、親会社と下請会社との関係もそうですが、相互に利行すれば、利益は巡廻して共に繁栄するのであります。困っている亀を見てたすけずにはいられなかったり、また病気の雀を看病したものがたりのように『情けは人のためならず』であります。商店のサービスはもとより輸出輸入の国際経済にしても、先進国との提携、さらに後進国の開発援助が大切であります。愚かなものは他人が利益すれば自分が損でもするように思っています。そうではありません。利行は自他の区別なき一つの法則であって、自他ともに利益するものであります。自分だけの利益というものは大自然の法則にそむき、決して久しく栄えるものではありません。商店も、会社も、企業も、国家も、世界も、この利行の法則にのっとって運営すれば、必ず隆盛するのであります。

敬愛信

信濃教育

長野県の教育の伝統を築いてきた信濃教育会から、年間八回の連載を依頼されました。大変ありがたく嬉しいことでした。一回の字数が六三〇〇字です。かなりの量ですので、締め切りに追われてはいけないと思って、三月までにはすべてを書き終えようと目標を立てました。内容は、円福寺愛育園に始まって(第一回)、円福寺愛育園(第八回)で終わります。

正月のさまざまな後始末が終わって、一月中旬に書きだしました。今(二月二十一日)、八回の

全てを書き上げました(未定稿です)。書きながらいろいろな思い出が浮かびました。特に、円福寺愛育園の仕事に就いた平成二〇年の混乱(八回)は、よく乗り越えたなあと今更ながらに思い出しました。頑張ってくれた職員のみなさん、ありがとう。残っている石崎主任保育士はもうろん、辞めていった職員も、みんな頑張ってくれました。今になると、色々なことが分かり、見えてきます。あの混乱を乗り越えた円福寺愛育園は、日本一の児童養護施設として、前人未到の荒野に社会的養護の金字塔を打ち立てます。

八回の表題を書きます。

第一回 児童養護施設円福寺

愛育園

第二回 極地方式研究会

第三回 やさしく教えるということ

第四回 誰もが学びたがっている

第五回 学年経営

第六回 校長の仕事

第七回 カンボジアの子どもたち

第八回 みんなよい子(題名は変わるかもしれませんが)

理科の教員だったので、理科の授業の多くになりました。楽しかったなあ。私にとつて授業を考えること、授業をすることは至福の喜びでした。

教育とは、子どもの心を育てること……書いてみてこれは一貫したテーマになっていると思います。

円福友の会・SABAスクール

愛の日の丸 SABA運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援(教育里親)

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会(愛育園児童自立支援)

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の協力金は 郵便振替 00520—7—16256

加入者 円福友の会 あてに御送金下さい

〒388-8005 長野市篠ノ井横田 円福寺内

TEL 026-292-0381

FAX 026-293-9629

[http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/
enpuku2@janis.or.jp](http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/enpuku2@janis.or.jp)